
剣の民と華の少女

夕闇夜空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣の民と華の少女

【Nコード】

N2795Z

【作者名】

夕闇夜空

【あらすじ】

大陸に八の国があり八の王がそれぞれ管理する。しかし、十年前の戦いで一国が滅び、今は七国。大陸は北西から南にかけて海が広がっていて北から東には山脈が広がり、東南には広大な砂漠というそんな世界。

傭兵のレオはある国の王都である少女を助ける事で世界が動き出す。剣を頼りに生きる少年の異世界ファンタジー。

第一話 剣の少年（前書き）

レオという主人公がなんやかんやで国を救う主人公最強ご都合主義物語です。

新参者でしかも初めて書いた作品で見苦しいかもしれませんが読んで頂けると幸いです。

注：誤字脱字があるかもしれません。

第一話 剣の少年

全てが焼け、壊され、砕かれ、地獄と化していた。

何故こうなったのは自分でもわかっていない。

自分の近くには沢山の死体が転がっていた。近衛騎士のリカルナ、侍女のリアーナ、庭師のカール、弟のサイト、執事のフレデリック。

ここは地獄なのか？

その疑問に伝えてくれる者はもう誰も居ない。

呆然と立ち竦んでいるとリカルナの最期の言葉を思い出した。

『逃げて下さい!!!』

その言葉を実行するために、脱出用の地下通路から逃げ出した。

物語を語る前にこの世界の事を話そう。

この世界は魔法が存在し、科学がそれなりに発展した夢のような世界だ。

ただ残念な事に飛行機や戦車、銃などの近代兵器は一切無い。そのため物語の舞台はとある一つの大陸だ。

この大陸は八つの国を八人の王がそれぞれを治めて平和が続いていた。というのは、今は昔。

現在は十年前に起きた戦争により、一つの国が滅ぼされ、七つの国がこの大陸で鎬を削っている。

第一の国、ティルナノーク王国。

第二の国、神聖ティリア王国。

第三の国、レグリクス連合国。

第四の国、アルゼス王国。

第五の国、ヴァルキュリア公国。

第六の国、プログレス王国。

第七の国、ヘルヘイム帝国。

十年前まではここに第八の国としてティルヴィング王国があったが、ヘルヘイム、アルゼス、プログレス、ヴァルキュリアの連合軍によって滅ぼされた。

これをティルヴィング滅亡戦と言い、それを機に大陸中を巻き込んだ冷戦が始まった。

この物語はそんな時代の中にあるティルナノグ王国での出来事を綴った物だ。

何処までも空という物をあなたはどれだけ見た事があるだろうか。今、漆黒の髪をした彼……レオンハルトが見ているのはそんな空だった。

「はあ」

レオンハルト、通称レオは退屈そうに溜め息を吐いた。

彼が何故そんなに退屈そうにしているかという……。

「神聖ティリア王国から歩いて一カ月。……流石に飽きたな」というのが理由だった。

レオは今、ティルナノグ王国の王都ガリレクスに徒歩で向かっている。

通常、ティルナノグとティリアがいくら隣国だからといっても徒歩で移動する距離ではない。

良くて蒸気機関車、悪くても馬車で移動するのが一般的だ。

因みに、蒸気機関車は乗るのにレオの年収五年分が必要なので無理であった。

「割のいい仕事だからって無茶しすぎたか？」

レオは傭兵だ。

傭兵には独自のネットワークがあり、レオは同じ傭兵の仲間から割のいい仕事を紹介してもらったのだ。

しかし、その仕事は依頼主の都合で前金が貰えず、レオは仕方無く節約しながら目的地のガリレクスを目指している。

「どこまで行けど街は見えず」

もう一度溜め息を吐いて足を止めた。

「ん？」

足を止めたおかげでレオはある事に気がついた。

それは雨や風のせいで腐り落ちた看板だった。

「ガリレクスまで残り二キロ」

その後、歩き出したレオの足取りはさっきと比べ、幾分か軽やかなモノになっていた。

「やっと着いたあゝ」

レオはベッド以外窓しか無い木造の部屋で脱力感の漂う声をあげた。

部屋の窓は建て付けが悪いらしくガタガタと音を立てて揺れている。

何故、こんなボロ部屋に泊まっているかというと、やはりお金が無いからだ。

倒れ込むようにレオはベッドに寝転んだ。

「一カ月振りのベッドだ」

余程疲労が溜まっていたのだろう、それからレオが深い眠り付くまでそう時間はかからなかった。

六時間後。

「ふあゝゝ」

秋のこの時期には夜と言ってもいい時間にレオは己の空腹感で

目が覚めた。

まだ寝ぼけているのだろう、レオはふらつきながらモカバンからコートを取り出して羽織り、宿からソソソと出て行った。

「……眠っ、腹減った」

そんな愚痴を言いながらもレオは街を歩き回り、地形を頭の中に叩き込んでいた。

これは万が一の為に逃げ道の確認や戦闘に陥った時の地理の利を活かす為に必要な行動だった。

しかし、今日は運が悪かったらしい。

「イヤッ、離してっ！！」

「大人しくしろよ。怪我したくねえだろう？」

表の通りから外れて裏路地を散策していると奥にチンピラのような男達が一人の女の子を囲んでいた。

レオはどうするか一瞬だけ迷ったが、真っ直ぐとチンピラ達の方に歩いて行った。

「へへっ、こちら辺は幾ら助けを呼んだって来ねーよ」

「大人しく俺らと遊ぼうや」

粘ついた気持ち悪い声にレオは眉をひそめた。

「誰があなた達なんかとっ！！」

少女は近付いて来る男が余程嫌だったのだろう。彼女は力一杯の平手打ちをチンピラに浴びせた。

その音でさっきまで騒いでいたチンピラが一斉に静まり返った。

「……てえ、いてえなこのクソアマー！！」

叩かれたチンピラは怒りのあまり声を荒げて腰に付けた短剣を抜き、少女の首元に押し付けようとした。

マズい。

そう思ったレオの反応は一瞬だった。

レオは五メートルの距離を一秒の半分以下の時間で詰め、男の短剣を持っている腕を背中側に回して骨を外した。

ゴキーン、と嫌な音が鳴って男は地面にのたうち回った。

「ぎゃあああああ！！」

レオは同時に男達と少女の間に体を入れてチンピラを牽制する。
「え？」

少女は訳の分かんないという顔をして目を丸くした。

それは他のチンピラ達もそうだった。彼等は仲間がやられたのに思考が追いつかず、呆けた顔でレオを見返すだけだった。

数秒間の沈黙。

「……て、てめえ何だ！？」

一人が声を出すと周りのチンピラも汚い言葉で罵倒してくる。

レオはくだらないと溜め息を吐き、どうしようかと考えた。

考え無しで乱入したしなあ。とりあえず、全員気絶してもらうか。

考えをまとめたレオが行動を起こそうと脚に力を込めるのと同じ時に後ろから声がかかった。

「私はいいから逃げて。あなたまで怪我しちゃう！！」

相手を気遣って言った言葉だったのだろうが、返事をレオがする前に彼女の台詞が戦いの合図になったようだ。

「うおりゃあ！！」

レオの一番近くに居たチンピラが意味の無い雄叫びを出しながら殴りかかってくる。

「危なっ」

い、と言う少女の声の前にレオは拳を途中で掴んでチンピラを投げ飛ばした。

チンピラは地面に強く背中を打ち付けられ、蛙の鳴き声のような声をあげて意識を失った。

普通、訓練を受けた事のある兵士なら受け身をとって気絶まではしない筈だ。

「な、なめんな！！」

「食らいやがれ！！」

そう叫びながら残ったチンピラ達が一挙に襲いかかって来る。

しかし、レオの対応は冷静だった。

ある男は投げ飛ばされ。

「ぎゃっ!?!」

ある男は殴り飛ばされ。

「ぐふう」

ある男は蹴り飛ばされた。

その後も相手の攻撃をいなしながら続け様に残る二人の意識を刈り取った。

それで乱闘は終わりを告げた。

「ふう、コレで終わりか？」

辺りを眺めてまだ動けるか探したが、意識を取り戻した男はいない。

レオは医者を呼ぼうか迷ったが、面倒だと思っただし、相手の自業自得だと考えて少女の方へ向き直った。

「大丈夫か？」

「え、あ……はい」

そこにはまるで絵画の中から出てきたような美少女が薄い桜色の肩まである髪をいじりながら驚いた顔をしていた。

「怪我とかは無い？」

「だ、大丈夫だと思う。どこも痛くないし」

癖なのだろう。彼女は指で髪をクルクルと回しながら質問に答える。

レオはその答えを聞くと、回れ右をして来た道を引き返そうとする。

その行動を少女は慌てて止める。

「ま、待って」

早く散策を終わらして晩飯にありつきたいレオは内心少しだけ不機嫌になりながら振り返る。

この時、レオは少女の地味だが仕立ての良い服を見て彼女が上流階級の間人だと思い、あまり関わりたくないと考えたのも帰ろう

とした理由でもあった。

「名前なんていうの？」

少女は少し怖がりながら勇気を振り絞って質問をした。

怖がるなら呼び止めないで欲しい、と思ったレオだったが、ここで不機嫌になって相手を怯えさせるのは得策ではないと考え、なるべく優しい声色で答える。

「レオンハルト」

そう答えた瞬間、少女の顔に花が開いた……無論、比喩的な意味だが。彼女は満面の笑みを浮かべる。

その表情にレオは自分の心拍数が上がるのを感じた。

「じゃあレオね。私はリア、よろしく」

「ああ、よろしく。リア」

そのまま踊り出しそうになっているリアにレオは一つ提案をする。

「ここだといつコイツ等が起きるか分からないから表に出よう」

表とは表通りの事だ。表通りは夜中まで賑やかなので襲われる心配が無いからだ。

リアはまるで水辺で遊んでいるかのようにチンピラ達をジャンプしてレオの前までやってくる。

「もちろん。助けてくれたお礼にご飯奢るわ」

振り返ったリアの笑顔に再びレオの心拍数が急上昇した。

リアがレオを誘って入ったレストランは街中でも相当値段の高い高級店だった。

「こういう所久しぶりだから緊張するな」

レオは情けなくそう呟く。

「そう？　気楽にしてればいいと思うけど」

「無理。貧乏人を甘く見るよ」

「言つて悲しくならない？」

「……若干」

二人は注文を終え、無駄話に興じていた。

因みに、レオはどれが美味しいのか分からずリアのオススメにする事にした。

「レオは傭兵なのよね？」

「ああ、一カ月前までテイリアで魔獣狩りの仕事をしてた」

魔獣とは魔法を使う高度な知性を持っている獣で、時々だが人や家畜が襲われる事がある。

魔獣狩りとは人や家畜を襲う事に常習性を持った魔獣を害獣と見なして駆除する事だ。

魔獣狩りの仕事は国の治安を守っている正規軍ではなく、使い勝手の良い傭兵に回って来る事が多い。

「へえ、その魔獣って何だったの？」

この質問に対して正直に答えようか迷ったレオだったが、嘘を付いても仕方無いと考えて本当の事を言う。

「サラマンダーだよ」

「サラマンダーを一人で倒したの!？」

驚いたリアが思わずテーブルに身を乗り出す。

サラマンダーは口から火の魔法を出す凶暴な大トカゲで、一人で倒すには並大抵の技量だと一切歯が立たない。

「そうだけど。リア行儀悪いぞ」

「うっ。……ごめをなさい」

しゅん、とまるで叱られた子犬のようにリアは肩を落とした。

「怒った訳じゃないから気にしなくていいよ」

可愛らしい姿を見てレオが微笑む。

「笑うなんてヒドいじゃない。レオ」

「ゴメンゴメン。リアの行動が……ね？」

思い出してまた笑い始めたレオを見たリアは頬を膨らまして自

分が不機嫌だと表現した。

「……レオの意地悪う」

その台詞をレオはわざとスルーして話を変えた。

「ところで、リアはあんな所で何をやってたんだ？」

出会ってからずっと気になっていた事をレオは聞いた。しかし、

リアは何も答ええないまま視線を泳がせていた。

「えっと、ほら。アレアレ………散歩？」

「なんで疑問形なんだ？」

「そんな事より私はレオの事聞きたいな！！」

リアは慌てて誤魔化す。

他人に言えない事ぐらいあるか、と割り切ってレオは話を戻した。

「まあ、そうやって色々な事をやって暮らしているよ」

「大変なのね」

「慣れれば苦じゃ無くなるよ」

苦笑いをしながらレオはそう話した。

「そういえばレオの髪って黒いけど出身はどこ？」

リアは珍しい大道芸を見るような眼で髪を見つめた。

何故、そのような疑問が出てきたかというと。この世界では髪が黒い人間は珍しく、大陸中でも一万は居ないからだ。

「名前を言っても分からないような小さな村だよ。その村には医者が居なかったらしく難産だったって母さんが言ってたな」

レオが言い終わると同時に注文した料理が運ばれて来た。

第一話 剣の少年（後書き）

薬学部なので授業が忙しくてちよつとずつ掲載する事になりますが、これからもよろしくお願ひします。

第二話 救出（前書き）

速く大規模なバトル展開を書きたい今日この頃。
とりあえず、ストック分を掲載します。

経験不足で駄文ですが、読んで頂けると幸いです。

第二話 救出

宿に着くとレオは部屋の中に人の気配を感じた。

一瞬ドアを蹴り破り、中の者を組み伏せようかと迷ったが、不法侵入者の素性に気が付き普通に扉を開けた。

「俺の部屋で何をしているんだ？」

ベッドに腰をかけている初老の男性にレオは気軽に声をかける。実際、レオとは十年來の付き合いがある。

「コレよコレ。お前さんもどうかの」

筋肉質だが年老いて皺のある手を口の前で上に動かす仕草を見せる。

「遠慮するよ。ロー爺さん」

ロー爺さんと呼ばれた彼は目を細めてレオを睨む。

「ワシの名はロードスなのだが」

「じゃあ、今度からはロージンって呼ぶぞ」

ロードスは諦めて溜め息を吐いた。

自分の荷物であるリュックをレオは椅子代わりに座り、歳の離れた旧友と向かい合う。

「で、本題は何かな？」

その一言で部屋の空気が張り詰めた。

「仕事の事で……ちよっとのう」

「やっぱり何かあるのか？」

レオはその言葉を予想していたように平然と返事をする。

何故レオが予想できていたかという点、今回の仕事が詳細不明な事と街の様子からだった。

「大規模に傭兵を集めているのに物騒な噂一つ聞かない。おかしいと考えるには条件が揃っている」

わざとらしくレオは説明口調で現在自分が解っている事を口にする。

「ワシ独自の調べだと雇われた傭兵の数は千近いらしいぞ」

「傭兵を千……。どこかと戦争でもするのか？」

「噂ではヘルガナール砦にも五百の傭兵が集まっているという話じゃよ」

ヘルガナール砦とは、かつて戦乱の時代に隣国のアルゼス王国が攻め込んだ時にその堅固な守りで相手を退けたというティルナノグ最強の砦だ。

レオに言わせれば、戦を知らないアルゼスを退けただけでよくティルナノグ最強と呼ぶなんて図々しいなという所だ。

「……戦争の噂無いようだし」

「やはり内乱かの？」

「その線が高いな」

憶測でしかないが、真実味はかなり濃いと二人は考えている。

レオとロードスは同時に今後の行動を決定した。

「いくら給金がよくても内乱わのう」

「俺は降りる。あんまりこういう事に関わると碌な事がおきない」

「お前さんが降りるのならワシも降りるしがないのう」

話がまとまり、ロードスは入り口から帰って行った。

独りになったレオはベッドにダイブして目を閉じた。

同時に心地の良い眠気がやってきてレオは意識を手放した。

「レ……」

遠くで俺を呼ぶ声が聞こえる。

レオは何も無い暗く寂しい所に立っていた。

「レ……きて」

声は暗闇に反響してどこから聞こえてくるのか解らない。

『ココは冷たい。早く』 『の所に行きたい。』

「……レオ」

遠くから綺麗な音で響いてきていた声が段々とはっきり聞こえてくる。

この声は……たしか。

「も〜レオ。起きて!!!」

ガツン。

音と一緒に地面に投げ飛ばされたような痛みが走る。

「ッ!!!」

痛みで悶絶するレオだったが、意地で声を出さない。

長年の傭兵生活により寝込みを襲われた場合の習慣で、レオは自分に攻撃を加えられなかった時には声をあげずにジツと息を殺すという事が身に付いている。

「やっと起きたのね。レオ」 反撃をする為に体勢を整えようとしたレオだったが、つい最近に出逢った少女の声に動きを止める。

「えっ、リア?」

居るはずのない人物の姿が眼に入ってくる。

「私以外の誰に見えるっていうの? レオは寝坊助さんね」

「いや、そういう意味じゃなくて何でココにいるのかって意味で言ってるのだけど」

その言葉に対してリアは拗ねたような顔をする。

レオはドギマギしながら昨日も同じような表情をしていた事を思い出した。

実際、客観的に見てリアは十人居たら十人が可愛いという程可愛らしい。そんな彼女が拗ねたような顔をするのは勿論破壊力抜群だ。

「私がレオの所に行っちゃいけないっていうの?」

「いや、そうじゃないけど……」

「ならいいのね。それじゃあ毎日来ましようかしら」

クスクスと笑いながら舞踏会で踊るようにクルッと回り、ベッドから離れる。

レオは溜め息を吐きながらベッドの横から起き上がる。

「朝食にしましょう」

その提案に頷いてレオはリュックから着替えを取り出す。

「リア、悪いけど下で待つててくれないか？」

「わかったわ。なるべく早く来てちょうだい」

部屋から出て行ったりリアを扉越しに見送り、レオはなるべく時間をかけずに着替えを済ます。

ちなみにレオが着ているのは通気性が良く動きやすいシャツと黒色の革のジャンパーのような物にジーンズのようなズボンだ。黒い革のジャンパーのような物はレオが昔ちよつとした理由でアルゼス軍と共に共闘した時に恩賞として貰った特別製だ。

あれから一年か、早いな。

レオが感慨深くアルゼス王国で起きた事を思い出していると外からリアの声が聞こえてきた。

「レオ、速く速く!!」

嬉しそうな明るい声に苦笑いしながらレオは宿の前を目指した。

廊下と階段、その二つを合わせただけの距離では時間的に五分もかからなかった筈だ。

しかし、宿の前に着くとリアがもう何時間も待たされたように不機嫌な表情をしていた。

「レオ、遅いわよ。私が待つてあげてるのだからもつと速く来なさい」

「そんなに時間は経ってないと思うんだけどな……」

「レオと一緒に時間は一秒でも惜しいもの。だから速くしないとダメなのよ」

そう言うつとリアはレオの手を引いて市場の方向に歩き始めた。

レオにはその足取りがスキップをしているように見えた。

「次はアツチに行きましょ!!」

朝から街の端から端までを見て回り、空はすっかり紅く染まっていた。

レオは歩き疲れた重い脚を半ば引きずりながらついて行く。

「ちよ、ちよっと待ってくれリア」

普段から怠惰に過ごしている訳ではないが、レオがいつも歩いている山道とは違い人混みを抜けるには力の入れ方が違うらしい。

「どうしたの、レオ？」

「そろそろ家に帰らないでいいのか？」

流石に女性より先に疲れたと音を上げるのはプライドが許さず、素朴な疑問を投げかけお茶を濁す。

すると、リアは不機嫌そうに頬を膨らませる。

「イヤよ。家に居ても作法がどうだとか、言葉遣いがどうのとか言われるのだもの」

「作法とか言葉遣いってやっぱリアの家って貴族なのか？」

昨日は隠すような素振りがあったが、今は気にしている様子は無い。

天然で忘れていくという事があるかもしれない、とレオは考えてもいるが。

「まあ、そんな所よ。レオになら話しても問題無いし」

「信用されてるのかどうでもよく思われてるのか解らない台詞だな」
「信用してるに決まっているじゃない」

クスリ、と笑いながらリアは躊躇する事もなく、堂々と言いつた。

言われてみれば、リアの言動は確かに粗雑かもしれないが、どこか気品があり優雅だった。

「それは良かった。仕事柄、信用される事が少ないから」

少し諦めたような顔をしてレオが愚痴をこぼす。

「仕事で人柄を見るのは愚の骨頂よ」

「そう言って貰えると嬉しいよ」

「ふふ、これくらいでいいのならいくらでも言っておけるわよ」

リアの笑顔で心が和んでくるのを感じていたレオだったが、ここである事に気が付く。

同時に嫌な汗が頬を伝い落ちる。

「なあ、リア？」

落ち着くために一拍だけ置く。

「貴族の娘さんがどこの馬の骨かも分からない傭兵の男と会っていいの？」

普通だったら打ち首も良いところだ。

リアもその事実には気が付き、気まずそうな苦笑いを浮かべる。

「……お父様にバレたらマズいかも」

「デスヨネ」

ダラダラ流れ落ちる汗と痙攣を起こしたかのような足の震えに耐えるレオ。

「だ、大丈夫よ。レオの事誰にも言っていないし、家は脱け出して来たし」

すかさず、フォローをするリアだったが。

「それって確実に誰かと密会しようとしてるって言ってるようなものだよな？」

「……言われてみたら」

それがトドメだった。

諦めて二人はぎこちなく笑いあい。乾いた笑い声が夕闇に消えていった。

気を取り直して歩き出した二人だったが、別れの時間がすぐに訪れる。

「あ、教会の鐘」

ゴーンゴーン。

遠くもなく、近くもない場所から体に響く鐘の音が聞こえてくる。

教会の鐘は夕食の時間や子供がちゃんと家に帰るようにという理由で午後六時に鳴らされる。

「ごめんレオ。私帰らなきゃいけないの」
それまで楽しそうだったリアが申し訳無さそうに頭を下げた。

「そう。ならお別れだね」

レオは寂しそうに笑う。

勿論、それにはきちんと理由がある。

「今日は家にお客様来ていて無理だけど明日また会いましょう」

リアの言葉を聞いてレオは決意する。

「……悪いけど無理だ。今日の夜この街を離れる」

「え？」

理解できないというような表情をしてリアは首を傾げる。

「だから明日には会えない」

相手が誰であろうとレオは深入りはしない。

それはレオが自分自身に誓った制約だ。

「……なんで？」

「今回の仕事には関わらないって決めたんだ」

少し震えるリアの声が壊れ掛けている心を抉る。

実際は仕事の事は関係無い。多少反乱に巻き込まれてもレオはものともしない実力がある。

しかし、反乱以上にリアの存在が彼にとってこの街に居られない原因になっている。

「でも、この街を離れる理由にはならないじゃない」

「今回の仕事はそれだけ面倒な事なんだ」

たった二日前に知り合った自分をこんなにも大切に思うリアは優しい娘だとレオは思った。

だから辛い。自分の勝手な制約で彼女を傷付けるのが、レオには剣で身を貫くように辛い。

「せつかく、仲良くなれたと思ったのに」

リアの瞳に涙が浮かぶ。

「レオも私を裏切るんだ」

その台詞をレオは黙って受け止める。

「レオのバカ!!!」

そう叫んでリアは走り出す。

その背中を見つめながらレオはせめて言いたかった言葉を口に
する。

「リア。家でおかしな様子があったらすぐに逃げる」

貴族なら反乱で狙われるかもしれないと思ったレオの忠告だっ
たが場違いにも程がある言葉だった。

「準備は終わったかの？」

「ああ、すぐに出れる」

リアと別れた後、ロードスが宿まで訪れ、レオは支度を整えた。
「それにしても静かだな」

辺りは真つ暗になっており、時間も深夜と言って過言は無い。

街の中心部に灯りが見えるが、それは城を警護する兵士達の為
にある灯りだ。

「……すまない」

ロードスに聞こえないようにレオは城の方向へ謝罪をする。

「この時間だと門からは出れないからのう。水路に向かうぞ」

「水路？」

「水路と言っても数ヶ月前の大雨で出来た自然の水路だかの」

ロードスによると大雨により川の水が溢れ、都市を守る城壁に
人が一人通れる程の穴が出来たらしい。

「水が満ちていた時と違って今は単なる大穴になつとるからちよう
ど良いじゃろう」

「そこまでどの位かかる？」

「ここからだ、そうさなあ十分程かかるじやろっ」

「そこまで兵士に見つかからないようにしないとな」

夜中になると不埒な輩が活動を始める場合が多い。その為にこの時間は兵士達が巡回している事が多い。

無論、見つければ宿が牢屋になる事は確実だ。

十分後、ロードスが言った通りに到着する。

「それにしても今日は異様に静かだな」

普段なら二回か三回は兵士に出会す筈なのだが、レオ達は一度も姿すら見ていない。

「……何か嫌な予感がするな」

「奇遇じゃの。ワシもそうなのじゃよ」

普通だったら気にし過ぎだと思うところだが、長年傭兵をやってきた二人にはそれが取り越し苦労には思えなかった。

「こういう時は逃げるのが一番じゃな。先に失礼するぞ」

そう言い残し、ロードスは水路に入っていく。

水路は小さく人が一人這って入れる位の大きさだったので、レオはロードスが無事に通り抜けるまでその場で待った。

「……！！」

「……！！」

ロードスが出口に到着する前にそう遠くない所から言い争いのような怒鳴り声が聞こえる。

「マズい、ロー爺さん」

急いで水路に入ろうとしたレオの視界にある人物が一瞬映り込んだ。

レオがこの街から無事に出て行くには早急に水路に入ればいい。しかし。

「あんな顔されたら……」

レオは背負っていた荷物をその場に置き、腰に下げている鞘から歪な刀……紫竜しりゅうを抜く。

歪と言っても形は刀を模している。違う所と言えば幅が広いのと峰にもう一つ刀を取り付けたような形をしている事だろう。

「先に行つてくれ」

「あい、わかつた」

そう一言言い残し、レオはある人物を助ける為に駆け出す。

レオが修得している剣術は少しだけ変わっており、その剣術の基礎を静止と動作の速さにしている。

つまり、静止した状態から一気に最大限の加速をするのがレオの剣術の基礎だ。

「俺も甘いな」

そう呟くとレオは水路から数十メートル先の門をスピードを落とさずに直角で曲がる。

曲がった先は一本の路地になっており、奥が行き止まりになっていた。

「へへ、追い詰めたぜ」

「追いかけてこは終わりか」

奥の行き止まりの壁に一人の女の子と三人の男が居た。

三人の男の内二人は傭兵らしく、統一性の無い格好をしている。「盛るな、傭兵風情が」

ただ一人だけ白の鎧で身を固めているリーダーと思われる騎士が二人の傭兵の前に出る。

あの格好はダルタニア騎士団。

ダルタニア騎士団とはこのティルナノグで最強と呼ばれる騎士団だ。

普段はダルタニア領に居る筈だけど。

元々、騎士団とは領地を持っている貴族が自分の領地と国を護る為にある。ダルタニア騎士団も通常ならダルタニア領で警備や訓練をしている筈だ。

因みにダルタニア領はガリレクスのある国王領の隣に位置する。「失礼しました。この者達は少々礼儀を理解できないらしくて」

騎士の男は恭しく頭を目の前の少女に下げる。

「……………」

しかし、少女は口を結び、相手を睨み付ける。

気丈に振る舞ってるのだろうが、少女のては恐怖から小刻みに震えていた。

「そろそろ城にお戻り下さい。リアーナ・サ・ティルナノーグ殿下」

その騎士の言葉にレオは目を見開いて驚いた。

何故なら追いかけていた少女はこの国の第二王女だったのだからだ。

「……………ふざけないでっ！！」

王女は敵意のこもった眼で騎士を睨む。

すると、騎士は肩をすくめ、隣に居た傭兵に行けと顎で命令する。

今だっ。

レオは一瞬で十メートルの道をゼロにする。

その動きは予備動作無しで静止の状態からトップスピードになる為、レオが瞬間移動したように周りの人間からは思えただろう。

「はっ！！」

騎士と傭兵の間をすり抜け、王女に手を出そうとしていた傭兵の腕を刀の峰で叩き折る。

同時に振った刀の勢いで体を反転させ、そのままスピードを付けて腕の折れた傭兵に回し蹴りをおみまいする。

「リア大丈夫か？」

突然の出来事にレオ以外の全員が呆然としてみると、レオはリアーナ……………リアに優しく声をかける。

「レ、オ？」

「それ以外に見えたなら医者を紹介しようか？」

驚いているリアにレオは軽口で答える。

「なん」

「ぎゃあああ、腕が腕が俺の腕が！！」

リアが何かを言う前に腕を折られた傭兵が叫びながらのた打ち回る。

それを見ていた騎士が鋭い眼でレオを睨む。

「貴様、何者だ？」

「そう聞かれて答える人間が居ると思うのか？」

「……減らず口を」

「褒め言葉として受け取っとくよ」

ギリ、と騎士は歯ぎしりをしながら剣を抜く。

騎士の剣はレオと違い、ティルナノグで伝統的な両刃の長剣だ。

「行け」

短く隣の傭兵に命令し、騎士は一步下がる。

「あなたには怨みは無いが、コレも仕事なんでね」

「こつちはボランティアだ。気にするな」

傭兵はレオの言葉が終わると、問答無用で上段に刃こぼれのした剣を振り上げる。

一連の動作からそれなりの手練れだと推測されるが、レオには動きが単調過ぎて欠伸が出そうになる。

「ぐふう」

剣が振り下ろされる瞬間にレオは脚の全ての筋力を使い傭兵の前に移動する。

それは余りに速過ぎて瞬間移動と言われても信じられる速さだった。

同時に左肘で水月……鳩尾みそめいをえぐる。

傭兵が倒れ、腹を押さえてうずくまる。

騎士は悔しそうにレオを睨み、剣を中段に構える。

「そんなナマクラで戦うのか？」

「貴様！！　ダルタニア騎士団長に与えられるこの剣をナマクラ

だと！！」

激怒した騎士は斜めに剣を振り上げ、飛び込んでくる。

今だ。

振り下ろす瞬間にレオは全て筋力を使い跳躍する。
カチャン。

「えっ？ いつの間に？」

リアが驚いて思わず声をあげる。

納刀し、レオはリアに微笑みかける。

「リア、行こう」

「え！？ でも」

オロオロ、とリアはレオと騎士の間を交互に見比べる。

「大丈夫」

微笑みながらリアの手を握り、落ち着かせる。

だが、レオの予想とは反対にリアの顔が真っ赤に染まり、心臓が狂ったように拍動する。

「俺の勝ちだ」

台詞と同時に騎士が握っていた剣が中央から二つに折れる。

折れた、と表現するより斬れたと表現した方が正しい。

その事は武器を使用不可にするだけでなく、騎士の心も折り再起不能にした。

「……………すごい!？」

驚くリアを引っ張り、ロードスの待つ水路に向かった。

第二話 救出（後書き）

先日あったテストの前日に「明日のテストが終わったら二次元に旅立つんだ」と死亡フラグ建て、見事に爆死しました。

そんな馬鹿のような単なる馬鹿が書いてる小説ですが、これからも暇つぶしで読んで貰えると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2795z/>

剣の民と華の少女

2011年12月10日01時46分発行